

# 海の百万石 銭屋五兵衛

安永2年(1773年)11月25日、加賀国宮腰(現在の金石町)に生まれ、幼名を茂助といました。翁より七代前の吉右衛門の時より金銭両替商を営むようになり、屋号を銭屋とよんでいました。17歳で家督を継いだ翁はその後、新たに古着・呉服商なども営んでいます。海運業は39歳の時、質流れとなった120石の古船を修理して米を運んだのが最初でその後、54歳から20年あまりで、全国に30数店にも及ぶ支店を持つ「海の百万石」と呼ばれる豪商となりました。

また、海運業の他に材木・生糸・海産物・米穀の間屋も兼ね、保有した船舶の数は大小二百隻余といわれています。加賀藩から銀仲棟取(ぎんずわいとどり)、問屋職、諸算用聞上役(しょうさんようききあげやく)などの諸役をおおせつかり藩の金融経済の大切な仕事につく、たびたび御用金の調達もいたしました。御手船を建造し、加賀藩御手船裁許の役目につき、苗字帯刀まで許され、まさに帆に風のはらむ船の如く、翁の活躍は鎖国令下の時代だけに目のさめるものがあったといえましょう。翁の外国貿易説では、オーストラリア南方のタスマニアやアメリカ合衆国まで渡ったといわれています。加賀藩は最初の頃、銭五の海外貿易を黙認し、財政建て直しを計っていました。しかし加賀藩は翁の目ざましい活躍が幕府に知られることを恐れ、このまま翁を放置しておけなくなったのです。そのころ、翁は25.5キロ、面積2576ヘクタールの河北潟を20年計画で干拓し、美田にしようという計画をしていました。

しかし、嘉永4年(1851年)から始めた工事は難行し、潟に死魚が出たり、それを食した漁民が中毒死する河北潟事件が起きたのです。嘉永5年(1852年)に銭屋は毒を投入した疑いで一族検挙され、翁は同年11月80才で牢死しました。かつての一大海商も時の権力には勝てず、身に覚えのない罪に苦しんだことは銭五のなした事業が偉大であっただけに、今日の河北潟干拓完成とも思い合わせて感慨深いものがあります。翁は風雅の道にも親しみ亀巢と号して詩文俳句も能くしました。今や翁の名声は年を追って高まり、その偉業は後世に永く語り伝えられるであります。

## 加賀百万石の経済を支えた海の豪商



北前船

## 石川県金沢港大野からくり記念館



のぞきからくり



茶運び人形

## 幕末の科学技術者 大野弁吉の世界

大野弁吉(1801～1870年)科学者、中村屋弁吉ともいう。京都五条通り羽細工師の子として生まれ、20歳のころ長崎に行き理化学、医学、天文、暦数、鉱山、写真、航海学を取得した後、突然対馬に赴き朝鮮にも渡ったといわれています。帰国後京都に帰り中村屋八右衛門の長女うた(加賀国大野村生まれ)の婿となり、1831(天保2年)石川郡大野(現金沢市大野町)に来て永住しました。金石の回船問屋銭屋五兵衛の助言者となりましたが、藩主が弁吉の博学をきき20人扶持でめしかかえようとしたが、それに応じず、生涯清貧のうちに過ぎました。

当時としては最先端の科学知識を駆使した発明品の数々は、現東芝の創業者で、「からくり儀右衛門」とよばれた田中久重の技術に匹敵するといわれています。また、一東、鶴寿軒と号し木彫、ガラス細工、塗り物、蒔絵などのほか、からくり人形には優れた名作を多く残しました。